



景況感はコロナ禍で大幅に悪化 担い手農業者は高い投資マインド

—農業景況調査(2020年7月調査)—

景況調査

農業の景況感のほか、新型コロナウイルス感染症の拡大による売上高や経営への具体的影響を調べました。

プラス値からマイナス値へ転換

2020年上半期(1~6月)の農業全体の景況感を示す農業景況DIは▲25.9となりました(表)。2019年の通年実績である6.0から31.9ポイント低下し、マイナス値に転換しました。

業種別では、稲作(北海道:20.1、9年通年実績の26.5から41.5ポイント低下し▲15.0、都府県:11.4から26.9ポイント低下し▲15.5)、畑作(31.6から48.6ポイント低下し▲17.0)、果樹、酪農

(北海道、都府県)、プロイラーがプラス値からマイナス値に転換しました。

肉用牛(▲0.2から77.9ポイント低下し▲78.1)、施設花き(▲20.2から44.0ポイント低下し▲64.2)、茶(▲53.1から31.3ポイント低下し▲84.4)については、作年の通年実績がマイナス値であったところ、さらに大幅に悪化しました。

新型コロナウイルス感染症拡大

に伴う外食需要の喪失や各種イベントの中止などが影響し、価格が下落したことが要因として考えられます。

一方で、養豚は▲4.1から31.4ポイント上昇し27.3とプラス値に転じました。外出自粛で内食需要が増加、価格が上昇したためと考えられます。

販売単価DIは、▲6.9から24.5ポイント低下し、▲31.4となりました。

業種別では、養豚を除いた業種でマイナス値となっており、とくに肉用牛(▲21.5から69.6ポイント低下し▲91.1)や茶(▲63.5から19.4ポイント低下し▲82.9)、施設花き(▲25.3から40.3ポイント低下し▲65.6)が大幅なマイナス値となりました。

販売単価DIの低下に伴って、収支DI(▲1.5から30.1ポイント低下し▲31.6)と資金繰りDI(0.4から20.5ポイント低下し▲20.1)も、大幅に低下しています。生産コストDIは▲38.8から5.9ポイント上昇し▲32.9となりました。小幅に改善しつつも引き続き大幅なマイナス値で推移しています。

この調査結果から、多くの経営体が厳しい経営状況にある様子が

うかがえます。

見通しはさらに悪化

農業景況DIの2020年通年見通しは▲42.0となりました。上半期実績の▲25.9からさらに16.1ポイント悪化しています。厳しい見通しとなった理由として、コロナ禍が収束する見通しが立たないことが考えられます。

業種別に見ると茶(▲84.4から4.8ポイント上昇し▲79.6)、肉用牛(2020年上半期実績の▲78.1から0.5ポイント低下し▲78.6)、施設花き(▲64.2から5.4ポイント低下し▲69.6)は大幅なマイナス値が継続する見通しです。

一方、稲作(北海道:▲15.0から39.7ポイント低下し▲54.7、都府県:▲15.5から26.5ポイント低下し▲42.0)、畑作(▲17.0から31.9ポイント低下し▲48.9)、果樹(▲23.5から27.7ポイント低下し▲51.2)では今後、大幅に悪化する見通しとなりました。稲作、畑作、果樹は、下半期に収穫および販売をおこなう経営体が多いため、通年見通しではコロナ禍の影響への強い懸念が反映されたものと考えられます。

養豚(27.3から8.5ポイント

景況調査

表 各種DIの推移

業種/時点	景況DI			販売単価DI		収支DI		資金繰りDI		生産コストDI		雇用状況DI		設備投資 予定ありの比率		
	2019年 実績	20年 上半期 実績	20年 通年見 通し	2019年	20年 上半期	2019年	20年 上半期	2019年	20年 上半期	2019年	20年 上半期	2019年	20年 上半期	2019年	20年	
農業全体	6.0	▲25.9	▲42.0	▲6.9	▲31.4	▲1.5	▲31.6	0.4	▲20.1	▲38.8	▲32.9	▲34.9	▲29.2	54.9	57.3	
耕種	稲作(北海道)	26.5	▲15.0	▲54.7	▲2.4	▲33.0	17.9	▲28.3	7.9	▲13.0	▲40.4	▲44.4	▲36.9	▲34.8	56.3	63.8
	稲作(都府県)	11.4	▲15.5	▲42.0	13.4	▲21.0	4.5	▲20.3	4.9	▲13.5	▲19.3	▲30.2	▲29.5	▲27.3	59.7	62.1
	畑作	31.6	▲17.0	▲48.9	▲8.6	▲34.6	29.0	▲18.7	14.7	▲11.2	▲45.6	▲40.3	▲42.7	▲39.6	60.4	67.9
	露地野菜	▲9.3	▲37.3	▲45.3	▲43.1	▲34.7	▲18.4	▲35.5	▲13.5	▲28.4	▲53.1	▲46.4	▲38.2	▲34.3	50.7	54.0
	施設野菜	▲22.4	▲24.8	▲26.3	▲31.2	▲22.7	▲27.2	▲29.5	▲19.3	▲23.0	▲57.6	▲47.5	▲30.1	▲25.3	44.9	51.0
	茶	▲53.1	▲84.4	▲79.6	▲63.5	▲82.9	▲54.0	▲85.0	▲40.5	▲65.6	▲51.6	▲10.5	▲39.5	▲23.5	35.5	36.1
	果樹	7.5	▲23.5	▲51.2	15.7	▲7.5	▲4.9	▲36.2	2.0	▲20.6	▲48.1	▲41.4	▲36.0	▲26.9	46.6	40.9
	施設花き	▲20.2	▲64.2	▲69.6	▲25.3	▲65.6	▲22.3	▲67.9	▲15.2	▲49.4	▲55.7	▲37.4	▲29.9	▲29.7	38.2	50.0
	キノコ	▲23.2	▲21.1	▲10.6	▲46.4	▲5.4	▲30.5	▲9.7	▲29.0	▲18.4	▲56.6	▲42.1	▲42.0	▲27.6	52.9	50.7
畜産	酪農(北海道)	30.3	▲5.5	▲21.7	33.0	▲27.8	17.6	▲11.3	24.9	▲1.1	▲37.1	▲26.2	▲38.7	▲33.5	57.0	53.0
	酪農(都府県)	8.4	▲17.7	▲16.8	34.2	▲32.7	▲3.6	▲23.9	1.6	▲10.5	▲46.6	▲23.3	▲35.3	▲28.4	63.5	58.7
	肉用牛	▲0.2	▲78.1	▲78.6	▲21.5	▲91.1	▲7.3	▲81.7	0.7	▲57.4	▲37.4	▲20.5	▲32.9	▲24.0	55.6	52.9
	養豚	▲4.1	27.3	35.8	▲24.5	53.8	▲7.8	31.6	2.3	19.5	▲24.7	▲4.1	▲29.8	▲27.1	58.5	64.1
	採卵鶏	▲38.9	▲37.7	▲49.1	▲53.2	▲53.5	▲46.0	▲32.1	▲28.6	▲36.8	▲46.9	▲8.8	▲38.9	▲29.8	48.1	59.3
	ブロイラー	14.7	▲8.3	▲30.1	▲28.3	▲4.2	5.4	▲8.5	17.4	4.1	▲28.0	▲12.3	▲37.4	▲18.0	57.5	65.8

【DIについて】 アンケートへの各項目への回答は、「①良くなった ②変わらない ③悪くなった」から一つ選ぶ形式となっており、前年と比較して「良くなった」の構成比から「悪くなった」の構成比を差し引いたもの。

「ほぼ影響はない」とした回答は約半数となりました。また「マイナスの影響がある」と回答した経営体は全体の49.5%と約半数となりました。また「ほぼ影響はない」とした回答は

半数の経営体にマイナス影響

新型コロナウイルス感染症拡大による売上高への影響、経営への具体的な影響の内容、および今後の課題について聞きました。

まず、売上高への影響については、「マイナスの影響がある」と回答した経営体は全体の49.5%と約半数となりました。

また「ほぼ影響はない」とした回答は約半数となりました。

「ほぼ影響はない」とした回答は

上昇し35.8%は、内食需要の増加で好影響が続く予想から、引き続きプラス値が継続する見通しとなりました。

2020年上半期の雇用状況DIは▲29.2となりました。前年実績の▲34.9から小幅ながら改善しつつも引き続きマイナス値で推移しました。

雇用状況DIの調査を開始した15年以降、全業種で大幅なマイナス値が続いており、依然として深刻な労働力不足の状況にあることを示しています。

設備投資に積極姿勢

設備投資の動向は、2020年

7月時点で「2020年に設備投資予定あり」と回答した割合が57.3%となりました。前年の54.9%から小幅の増加となっています。この数値は18年の57.1を超えて、直近10年のなかで最大であることから、投資マインドが高い状態が続いていることがうかがえます。

また、「2020年に設備投資予定あり」と回答した者に対して、今年度の設備投資額の増減見通しを聞いたところ、「昨年比で増加する」との回答が47.1%と約半数を占めました。「同程度」の33.5%と合わせると80.5%となり、設備投資額からも積極姿勢であることがうかがえます。

「コロナ禍の影響

32.8%と約3分の1を占めました。「プラスの影響がある」とした経営体はわずか3.2%という結果となりました。

業種別では、「マイナスの影響がある」とする割合は肉用牛(95.6%)、茶(91.0%)、施設花き(83.2%)の順に高くなりました。これらは景況DIの下落幅が大きかった

業種です。売上高への影響も大きいことがうかがえます。また、「ほぼ影響はない」とした経営体は、ブロイラー(56・2%)が最も高くなりました。次いで、酪農・北海道(55・3%)、養豚(49・5%)と続きます。

一方、唯一、景況DⅠがプラス値となった養豚は「プラスの影響がある」とする割合が33・2%と他業種と比べて高くなりました。「ほぼ影響はない」の49・5%と合わせると82・7%となります。

売上高の影響について「わからない」とする経営は稲作(北海道:36・4%、都府県:19・9%)、畑作(28・6%)、果樹(23・5%)で他業種よりも高い値となりました。これは上半期(1~6月)に収穫および販売の最盛期を迎える経営が少ないことが影響していると考えられます。

単価・相場下落が影響

経営への具体的な影響は、「単価・相場の下落」が最も高く68・4%となりました。次いで「既往販売・出荷ルート」の縮小・停止(32・9%)、「消費者への直接販売(直営所など)」の縮小・休業(24・2%)と続きます。図2。外食から内食へのシフトなど、消費行動の変化に

よる影響が大きかったことがうかがえます。

業種別では、果樹、キノコ、養豚以外の業種は「単価・相場の下落」が最も高くなりました(図省略)。とくに大幅に景況DⅠが悪化した肉用牛(97・6%)、茶(93・4%)、施設花き(89・8%)が突出して高い割合を示しています。

肉用牛および施設花きについては、外食・宿泊産業での需要喪失や冠婚葬祭含む各種イベントの中止が、茶においては近年のリーフ茶需要減少などによる価格下落に加え、新茶季節の販促イベントが中止になったことなどが、影響したと考えられます。

一方、「既往販売路の・出荷ルート」の縮小・停止」が最も高くなったのはキノコ(55・2%)、ブロイラー(50・0%)、養豚(46・2%)となりました。

果樹は「消費者への直接販売(直営所など)」の縮小・休業」が47・1%と最も高くなりました。この理由として、直売所や観光農園など消費者への直接販売が減少したことが考えられます。

畜産は課題に相違

コロナ下における経営の課題について聞いたところ、「コロナ支援

関連(政策・補助金)の情報収集」が最も高く46・0%となりました。次いで「販路の回復(取引高の回復)」の33・5%、「設備投資(省力化、設備合理化・増強)」の32・0%と続きました。図3。

「コロナ支援関連の情報収集」を1位の課題とした者は39・1%となりました。この値は、次順の「販路の回復(取引高の回復)」の15・9%の2倍以上の水準です。

「コロナ支援関連の情報収集」が重要度の高い課題であることがわかります。

政策や補助金など支援策に関する情報提供を求めている状況がうかがえます。

第2位、第3位の課題では「設備投資」や「運転資金の確保(金融機関からの運転資金借入れ、条件緩和)」などの資金調達関係、「雇用維持、人材確保・育成」の労働力関係の課題を挙げる経営が多くなりました。

業種別に見ると、耕種ではキノコを除いた業種で「コロナ支援関連の情報収集」が第1位となりました(図省略)。

2番目に高かった回答は、稲作(北海道)および畑作では「資材、原料の仕入れ安定化(39・1%、34・8%)」、果樹では「販売方法の多様

化(35・7%)」、施設野菜は「雇用維持、人材確保・育成(34・2%)」となりました。なお、キノコは「雇用維持、人材確保・育成(36・0%)」が第1位でした。

畜産では業種による課題の違いが鮮明となりました。

酪農は「資材、原料の仕入れ安定化(北海道:41・4%、都府県:34・0%)」、肉用牛では「コロナ支援関連の情報収集(58・8%)」、養豚では「生産体制や労務管理の見直し(46・3%)」、採卵鶏では「販路の回復(40・4%)」、ブロイラーでは「設備投資(42・9%)」が最多となっています。

今回ご紹介した内容を含む調査結果に関する資料は、当公庫ホームページに掲載しております。「日本公庫農業景況調査」で検索してください。

(情報企画部 高田圭介)

【調査概要】

- 調査時点・方法
2020年7月・郵送調査
- 調査対象
スーパーL資金/農業改良資金
融資先(計1万8219先)
- 有効回答数
5464先(回収率30・0%)

注:本文および図中にある▲は、マイナスを示します。

コロナ禍の影響

図1 売上高への影響

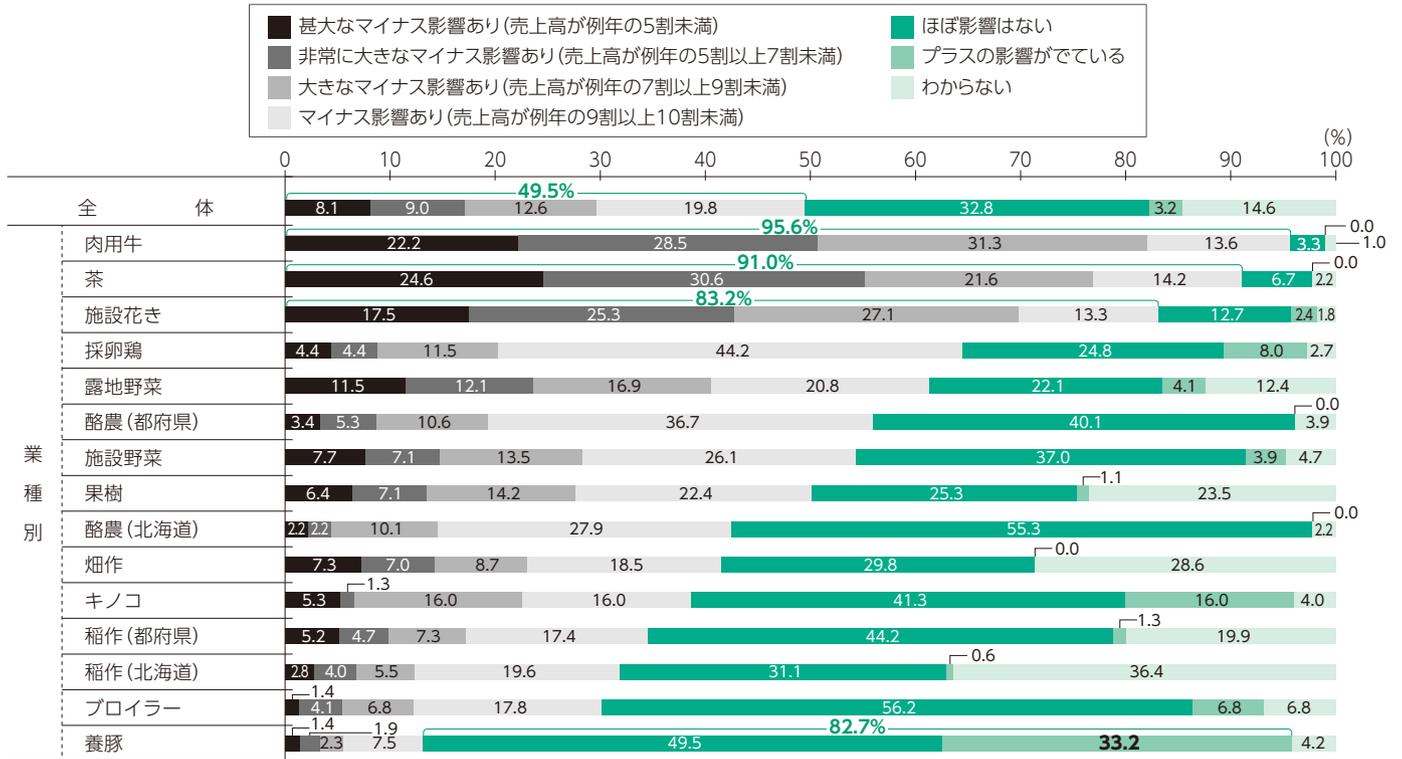


図2 具体的な影響の内容

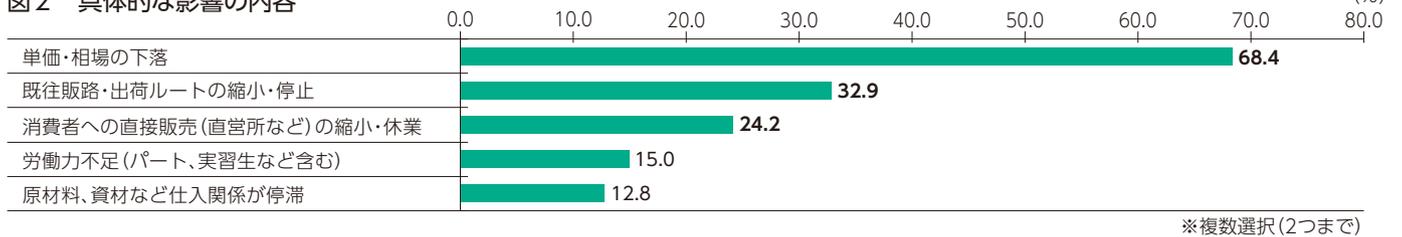
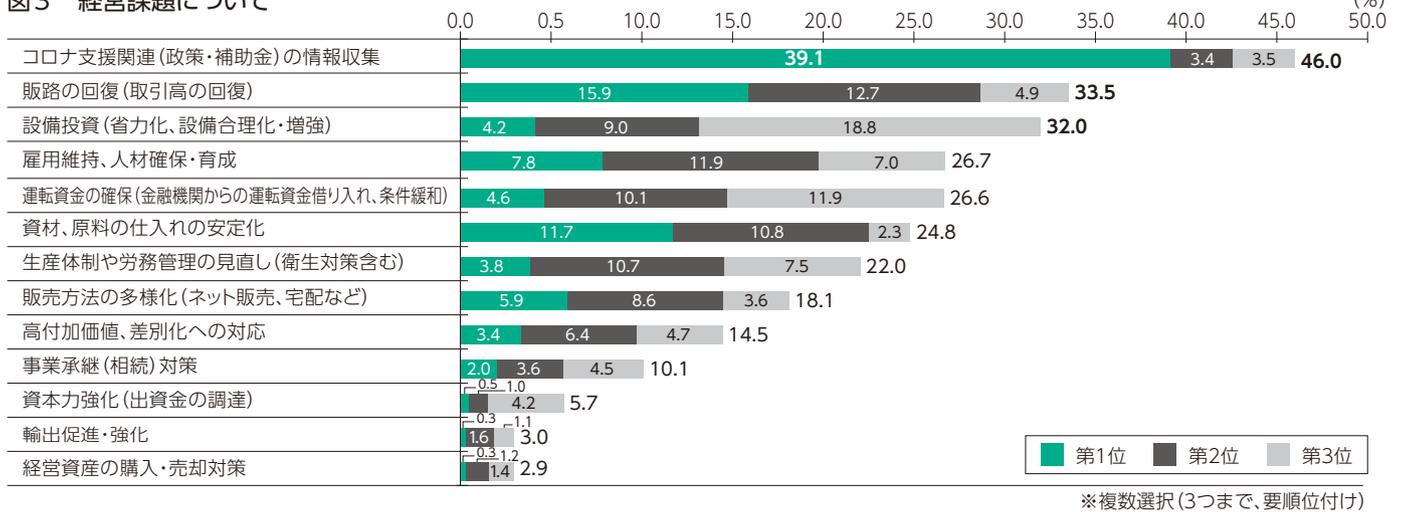


図3 経営課題について



今年82歳の父は、すこし変わり者だ。山育ちだからなのだろう、わたしの生まれ育った家の庭には、うっそうと木々が茂っていた。成長するにつれて、友達の家とはどうも様子が違う、と知ることになった。

椿などの花もあるけれど、ほとんどが「実のなる木」。山桃、枇杷、桃、栗、蜜柑……。仕事以外、父はその世話に明け暮れていた。収穫しては、近所や友人に配り、家族に食べさせる。旬は短いから、それを見逃さないように、いつも木ばかり仰いでいた。

庭涼し父の植えたる実のなる木

翔

大学入学と同時に故郷を離れてから、25年。一人暮らしの頃から、結婚して4人家族になった今も、月に一、二度、故郷から包みが届く。なかには、父の収穫した果実をはじめ、故郷の食べ物が几帳面に詰まっている。

そのありがたさを特別なことと認識したのは、2011年の東日本大震災のとき。当時暮らしていた浦安は液状化の被害が大きく、不安な一週間を過ごした。その後、半年間、小学生の長女と共に徳島に滞在した。人心地がついて故郷で食べ物を口にして、なんだ、この美味しさは、と衝撃を受けた。初めて故郷の味を、特別なものと感じた瞬間だった。それまで当たり前前に過ぎなかつた父の愛情を、ようやく実感した瞬間でもあった。

屋根に上って収穫した枇杷、一緒に袋掛けをした桃、絞ってもらった蜜柑ジュース……。旬の果実はいつも、幼い頃の思い出を鮮やかに連れてくる。味だけでなく、記憶をも味わっているのだ、と気づいた。何十年経っても、それらに育てられ、救われている。

囀や父母の庭木のふくらみに

翔



俳人
大高 翔

おおたか しょう
1977年徳島県生まれ。13歳より作句。藍花副主宰、俳人協会幹事、京都芸術大学非常勤講師。第四句集『帰帆』にて第一回俳句大学大賞。海外でのワークショップ活動にて2010年度徳島県阿波文化創造賞。俳句やエッセイの執筆と指導、講演を中心に活動中。

記憶を味わう

飼料生産と気象リスク

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構

畜産研究部門 飼料作物研究領域長

奥村 健治

農

林水産省が公表している『飼料をめぐる情勢』を見ると、18年度の飼料の供給量は、年間約2450万TDN*¹（*家畜が消化できる総養分量。カロリーに近い概念）となっています。飼料は乾草やサイレージなどの粗飼料と、穀類やトウモロコシ子実などの濃厚飼料の二つに大きく分かれますが、それぞれの自給率は粗飼料で76%、濃厚飼料が12%で、全体では25%です。他方、2020年3月に決定された『食料・農業・農村基本計画』では、30年度には飼料全体の自給率を34%まで引き上げることを目標としています。農研機構においても、国産飼料増産に向け、飼料作物の優良新品種や新たな栽培技術の開発に取り組んでいるところです。

飼料作物は他の農作物同様に、その生産において気象の影響を大きく受けます。例えば強風雨により倒伏したトウモロコシを、収穫機械で回収できずに収穫ロスが発生したり、作業効率の低下により燃料費が増加するなど、直接的・間接的に被害や損失が生じます。

台風による被害として、昨年関東地方などに大きな被害をもたらした15号および19号、16年に北海道に上陸し、その後の長雨も含め甚大な被害が生じた3個の台風などが挙げられます。地球温暖化の進行に伴い、台風はその強さが増す可能性が指摘されていますので、

自給飼料の安定確保のためには何らかの対策が求められます。

このような背景のもと、農研機構畜産研究部門では、生物系特定産業技術研究支援センターの「革新的技術開発・緊急展開事業（うち経営体強化プロジェクト）」において、独立行政法人家畜改良センター、公設試験場・普及機関、民間種苗会社のほか、現地実証をおこなっていただく生産者と連携し、「気象リスクに対応した安定的な飼料作物生産技術の開発」を2018年度から

20年度まで実施しています。地域の気象条件によりリスクや導入可能な栽培技術が大きく異なることから、このプロジェクトでは、地域に応じた気象リスクの軽減・回避技術の開発をおこなっています。



人工送風機によるトウモロコシの倒伏試験

例えば、北海道のように栽培可能な期間が短く、トウモロコシが一作しかできない地域で被害を軽減することをめざす一方、九州南部のように温暖な地域では多毛作など多様な作付体系の導入によるリスクの回避・分散をめざしています。また、被害発生条件や確率、減収率、これらに基づく収益性の試算やシミュレーションもおこなっています。このような取り組みが飼料作物生産における台風などの気象リスク対策技術として、それぞれの地域に応じた対策の進展に役立つものと考えます。

例えば、北海道のように栽培可能な期間が短く、トウモロコシが一作しかできない地域で被害を軽減することをめざす一方、九州南部のように温暖な地域では多毛作など多様な作付体系の導入によるリスクの回避・分散をめざしています。また、被害発生条件や確率、減収率、これらに基づく収益性の試算やシミュレーションもおこなっています。このような取り組みが飼料作物生産における台風などの気象リスク対策技術として、それぞれの地域に応じた対策の進展に役立つものと考えます。

F



Profile

おくむら けんじ
1961年愛知県生まれ、86年大阪府立大学農学研究科修士課程修了。同年農林水産省入省、草地試験場育種部に配属。沖縄県畜産試験場、北海道農業研究センターを経て2019年より現職。博士（農学）。専門は作物育種、とくにマメ科牧草の育種。



古代染色植物の日本茜を地域資源に 農と伝統工芸の関わりを復活させる

京都府南丹市

美山日本茜研究会代表

渡部 康子



日本茜で農地を守る

美山町は、京都府の北中部、福井県との県境に位置します。人間の数より鹿の数のほうが多い山のなかです。

過疎・高齢化が進んだ結果、昨今では荒れる農地が目立ち、かつての活気はみられません。農地もすごい勢いで原野化しています。そこで農地を守るため、私たちは日本茜ニホンアガネの復活に取り組んでいます。

日本茜はその根が古代から染料として使われてきました。染色の難しさや量がたくさん必要なことから西洋茜、インド茜に取って代わられ、現在では栽培する人もなく、染料屋さんでも手に入りません。

また染色技術も途絶えて久しいのです。けれど伝統工芸をされる方々にとって日本茜はあこがれの存在です。

茜は朝焼けの色、万葉集では美しいもの、愛お

しいものに対する枕詞として「あかねさす」が使われています。茜色の黄色が後ろにある赤は太陽信仰と結びついているのでしょうか。

農業委員でもある私は、日本茜を農地保全につなげようと考え、2014年に「日本茜復活プロジェクト」を立ち上げました。7年目の今年、売り上げがやっと100万円を超えました。

日本茜にたどりつくまで

私は、美山町の自然と人々に魅せられて30年前移住しました。そのころはまだ、衰退しつつあるとはいえ、農林業も元気でした。美山町農協は1970年代の始めから、「化学肥料使うな、鶏を飼え」という指導をしたり、「産直」という言葉がまだなかったころから軽トラで野菜を配達したりする一風変わった元気な農協でした。

まちおこしが盛んで移住促進のための会社がつくられ、農産加工にも力が入っていました。私も町のお母さんたちとグループをつくり、でき

たばかりの美山文化ホールで「花水木」という喫茶店を始めました。ランチの傍ら、美山牛乳のチーズケーキやサブレ、ヨモギのケーキなどをつくって、町営の施設などで売り始めました。農産加工協議会にも入れてもらい、先輩たちに手取り足取り、教えてもらいました。

でも、町は様変わりしました。2000年に、農協が合併し、美山町農協はなくなりました。農協が背骨となり、地域の農産加工を支えていたので、農産加工グループにとってはとても痛かったです。そして06年には町村合併で美山町もなくなりました。農産加工協議会も解散しました。

私は有志を募って、美山農産加工組合を立ち上げました。Aコープの前で「山菜のあく抜きシヨール」をやったり、そのころ増え始めていた茅葺かやぶきの家をまわる観光バスで車内販売をしたりしました。

その後、「美し山の草木舎」を立ち上げ薬草を

profile

渡部 康子 わたべ やすこ

1960年、横浜市生まれ。東京都立大学史学科卒。開発援助の仕事を経て、長野県に移住、自分で食べるものを自分でつくることから学び直す。91年より美山町に住む。美山農産加工協議会に加わる。2014年「美し山の草木舎」を設立。野草茶づくりや、つる籠編みや山の素材を生かすワークショップなどを展開。日本茜に出会い「美山日本茜研究会」結成。京都の伝統工芸の方々と協力して「王朝の草木染」の復活をめざす。南丹市農業委員。

美山日本茜研究会

日本茜の復活をめざして2014年に結成。京都府美山町の20aの圃場で日本茜を栽培。日本茜は猪も鹿も食べないことから、農地保全として取り組む。伝統工芸の方が茜の畑に通うようになり、19年「日本茜伝承プロジェクト」を結成、組みひもや友禅、日本刺繍とのコラボで展示会を開催。植物顔料の研究で草木染による友禅をめざす。「日本茜染校」を開催、苗づくりから染にいたるまで研鑽を積む。

日本茜との偶然の出会い

つくり、野草茶を販売し始めました。

2013年のある日、茶の木の間にヒヨロヒヨロ生えている一本の草にふと目が留まりました。四角い茎から四つのハート型の葉が出るその植物。それが日本茜でした。織物や染色の勉強をしていた娘さんが家に居候していたことがあり、彼女が「これが茜で根が赤い染料になる」と教えてくれたのです。希少で流通量が少なく、高価で、京都の染色家がほしがっていると……。染めてみようということになり、ためにオーガニックのハンカチを染めてみました。すると綺麗なオレンジや赤に染まりました。希少で流通していない植物が、美山には生えている。茜

は猪も鹿も食べない。これが栽培できれば農地を保全し、地域の活力になる……。夕焼け色に染まった布を太陽に透かすと、希望の光のように見えました。

14年、日本茜復活の取り組みは、京都府の「地域再生プロジェクト」に採択されました。おかげで、染色の勉強に行ったり、山梨県の富士吉田で栽培している方と聞けば訪ねたりできました。私は、「栽培できる」と確信し、美山町で圃場を確保し、手探りの生産を始めました。何しろ雑草ですので、退治する方法はあっても栽培する方法を書いたものは何もないのです。始める前は、雑草だから栽培が簡単だろうと思っていました。ところがこれがなかなかやっかいでした。寒さに弱く、芽吹くのが遅いので、

他の雑草に負けてしまう。暑さにも弱いので、日よけをしなければ枯れてしまう。「どこのお姫さまか」と尋ねたくなりました。

また、種をまいても育ちませんでした。発芽はするもののヒヨロヒヨロの苗ですぐ枯れてしまふ。挿し芽で増やすということに気づくまで2年かかりました。栽培期間は1年では根が細く、染料があまりとれません。根を太くするには3年かかることも知りました。2016年、試行錯誤しているのを京都新聞が「日本茜の栽培に成功」という見出しで記事にしてくれました。

その記事をきっかけに、京都で着物や帯をつくっている方々や製薬会社が美山に訪ねてきました。皆さんにお伝えしたのは、「まだ採れる茜根の量が限られていますので、畑を手伝い



上：日本茜の圃場（左）、茜染めをする筆者
下：3月に開催した展示会『日本茜伝承と未来』の様子

てくれる方だけにお譲りします」ということです。

栽培を広げるため、農家さんを回ってお願ひしましたが、栽培法も手探り、反収もわからない状態では協力してくれる農家さんはありません。そこで一般に広く呼び掛けてボランティアを募ることにしました。

応じてくれたのが草木染に興味がある人々でした。なかには伝統産業に関わる方もいらつしやいました。いまでは「日本茜染校」として年5回程度の講座を組み、苗起こしから栽培、染色までともに学んで研鑽を積んでいます。

現在、約2反の畑に栽培していますが、本格



葉の特徴がハート型と、乾燥すると根の赤く見える

的に作付けできたのは2017年からです。昨年度は栽培から3年目ということで、ある程度まとまった量の茜根がとれることになりました。これをどうするかということも茜染校の仲間と話し合いました。染料店に売ってお金にすることもできます。でも「茜は神様の草だから最初のみとまった収穫物は神様にささげたい」というのが皆の気持ちでした。また根つこの状態を見せられただけでは茜のすばらしさはわかりません。染められ、作品になってこそ、「すばらしい、素敵だ」と多くの人が思うことでしょう。そこで美山に度々通って来てくださっていた友禅作家で古代染色に詳しい山本晃先生にお願いして

作品の形にしていたくことになりました。

伝承へ展示会を開こう

そのためには資金が必要です。ちょうどこの年、京都府の農商工連携プロジェクトで立て替えていたお金が戻ってくるようになっていました。それを原資に、日本茜を使った作品を集めた展示会を開くこととし、「日本茜伝承プロジェクト」と名付けてスタートさせました。2019年のことです。プロジェクトの資金で布や糸を買い、出品いただく方たちにお渡しする。茜根も提供して作品にしていたく。作品が売れたら加工代や茜根代にする仕組みです。

山本晃先生の声かけで、日本刺繍士の木村千鶴さん、昇苑くみひもさん、服飾デザイナーの田中秀一さん、ガリ版作家の水口奈津子さんたちが集まってくれました。

山本先生は見る角度によって黄色に見えたりピンクに見えたりする薄茜の反物や掛け軸。木村さんは日本茜だけで17色以上染め分けて、秋や春を題材にした半襟や可愛らしいウサギのバック、紅葉の数寄屋袋。昇苑くみひもさんは扇や帯締め、可愛らしいアクセサリー。田中さんは間伐材を原料にした木糸で織った布を茜で染めたスーツやドレス。水口さんは可愛らしい絵本やインテリアの布を出品してくださいました。そして、プロジェクトの到達点であった展示会『日本茜伝承と未来』が20年3月1〜8日に京都市の知恩院和順会館に実現しました。展示のほか、期間中毎日、ギャラリートークや組みひもづくり体験や日本刺繍のワークショップな

どを開催しました。私たちも栽培の展示や苗の実物などを持ち込んでギャラリートークに加わりました。コロナが流行し始めた時期でしたが、多くの方に来場いただきました。その後、美山を訪ねてくださったり、茜染校に参加してくれたり、茜根を購入してくれたり、大きく輪がひろがりました。

伝統産業と農との結びつき

伝統工芸の方たちと一緒に仕事をするようになってあらためて気づかされたことがあります。日本の伝統工芸と言いなながらも、絹糸も布も染料も漆もほとんどすべての材料が中国をはじめとする外国からの輸入に頼っているということです。中国が禁輸したら日本の伝統工芸は成り立たない。また、伝統工芸の担い手である腕のある職人が、仕事が減って次々にやめていく。そもそも、道具をつくる職人がもういない。

以前にはあった農と伝統工芸との結びつきが養蚕業の衰退とともに切れてしまっています。職人を大切にしてこなかったことも伝統工芸衰退の理由だとわかってきました。同時に、上っ面だけではない本物の文化をつくるには、伝統工芸は農と結びつく必要があることも――。

いま、私たちは「京都産業21」の支援を受けて、茜の顔料化や茜根のフリーズドライ実験をしています。現代の技術も駆使し「王朝の草木染」をつくりたい。

日本茜染校の仲間とともに、日本茜という新たな地域産業資源を活用し、美山町の活性化に貢献していけるよう努力していきます。

『石川三四郎 魂の導師』

大澤正道 著



(虹霓社・1,500円 税抜)

百年後に同志を求めた人

宇根豊
(百姓・思想家)

石川三四郎はもう忘れられた思想家だろう。アナーキストであり、農本主義者であった彼が亡くなったのは、1956年、80歳だった。直接に石川の光と薫りを受けていた著者によって、この本は書かれた。しかし長く絶版となっていたのが復刊されたのは、とても喜ばしい。

石川 の思想を言い表している「土民生活」とは何だろうか。これは「デモクラシー(民主主義)」の石川流の翻訳語である。デモとはもともと「土着の民」のことで、クラシーを主義と訳さず「生活」としたのは、「主義者」を「足が地についていない」と嫌ったからだだった。

「吾らの生活は地より出で、地を耕し、地に還る。これのみである。これを土民生活と言う。真の意味でのデモクラシーである。地は吾ら自身である」。51歳の時に、石川は百姓を始める。「人

間は地と共に生きる以外に、何事もなしえない」からであり、「地を耕すのは、吾ら自身を耕すことだ」からだと言う。戦時中には、石川は配給を拒否し自給生活を貫いた。農の本質がわかってきたのだ。

そこで私は深く思いあたることがある。現在の農業の語り方に決定的に欠落してしまったものだ。農とは産業である前に、人間の生き方だったのではないか。そう思うと、途中からこの本の中の何かが、私の心の底の何かと響き合うことに気づいた。石川が何度も発禁になりながら個人誌を発行し続けたのは「哲学的な研究であった。それはペンによって、道義を唱えることを欲しなかったからである」「アジテーターではなく、教育者とならねばならない」からであった。いわゆる運動者とは、心根が大いにちがう。

石川は「主義は魂の表現でなくてはならない。各個人の魂から出た生活原則であり、行動基準であるべきだ」と断言し、百姓仕事を「(仏)法の如く修行するもの」と考えていた。「土民生活」の中でこそ、人間は本来「無二物」であることを自覚し、自分が見えてくるものだ。

現在の農業は人間の欲望を原動力にして、自己実現を目標にしているようにみえる。「土民生活」から離れてしまった。「自然の天則」に従う生き方は時代遅れになるうとしていた。百姓は、自分の魂・精神を深く耕す同志になればと、石川三四郎は言っているようだ。この本はそういう気持ちにさせてくれた。

読まれます 三省堂書店農林水産省売店 (2020年10月1日~10月31日・税抜)

タイトル	著者	出版社	定価
1 マッキンゼーが読み解く食と農の未来	アンドレ・アンドニアン、川西 剛史、山田 唯人/著	日経BP 日本経済新聞出版本部	2,000円
2 東大卒、農家の右腕になる。	佐川 友彦/著	ダイヤモンド社	1,800円
3 フードテック革命 世界700兆円の新産業「食」の進化と再定義	田中宏隆、岡田 亜希子、瀬川 明秀/著 外村 仁/監修	日経BP	1,800円
4 農業・農村政策の光と影	荒川 隆/著	全国酪農協会	1,500円
5 ビジネスパーソンの新・兼業農家論	井本 喜久/著	クロスメディア・パブリッシング	1,480円
6 平成農政の真実 キーマンが語る	菅 正治/著	筑波書房	1,500円
7 データ農業が日本を救う	窪田 新之助/著	集英社インターナショナル	840円
8 2030年のフード&アグリテック 農と食の未来を変える世界の先進ビジネス70	佐藤 光泰、石井 佑基/著	同文館出版	2,300円
9 フードバリューチェーンが変える日本農業	大泉 一貫/著	日本経済新聞出版社	1,800円
10 水産改革と魚食の未来	八木 信行/編	恒星社厚生閣	2,600円